

## はじめて漢方薬を処方される先生へ （「虚・実」診断からの処方方法）



金鞍博樹

Hiroki KANAKURA

山ニツ動物病院

Yamafutatu Small Animal Hospital

### はじめに

漢方学とは「証」の診断が基本となる医学である。しかし数千年前の人に対する漢方理論をストレートに応用すると不適応が生じる可能性がある。不適応因子は、環境因子、食生活、ヒトとペットの生理機能の差、「ペットは言葉を使えない」と言う事である。私は本学会発足以来からの会員であるが、同期の会員の多くが漢方薬から始まっていた。そしてその多くの会員は、ストレートに漢方学を習得し処方して行ったが年々漢方薬の報告が減る傾向にあった。ヒトの場合、それとは逆に年々漢方薬の需要、漢方に詳しい先生が急増している。

私の場合漢方エキス顆粒は伝統的な漢方薬ではなく、現代にマッチした漢方薬とスタンスを変えて処方し今に至っている。オーナーに開業医が求められているものは、理論ではなく結果である。より安全・確実な処方を行う事で結果はついてくると確信し漢方エキス顆粒を処方し続けている。

### 「虚・実」診断からの処方

現在の所「証」の診断の中の「虚・実」診断と、ヒトの薬理薬効を参考にして処方する事を薦めるが動物差がある。イヌの場合はほぼ人と同じ効果が期待できるが、ネコの場合猪苓湯しか適応しない。漢方薬はヒトの薬と言われる結果であるが、獣医師は真の獣医漢方学を確立しなければいけない。

漢方エキス顆粒の中で安全に処方できる製剤は、

不適応症状が少ない順で十味敗毒湯（TJ6）・猪苓湯（TJ40）・六君子湯（TJ43）・小青竜湯（TJ19）・抑肝散（TJ54）・疎経活血湯（TJ53）・十全大補湯（TJ48）の7種である。全て「中間証」の症例に適応している。また前記7種の漢方エキス顆粒の不適応症状は、西洋薬の副反応よりかなり低いと感じている。

7種類の漢方エキス顆粒で少ないように思えるが、皮膚病にはTJ6・TJ48。上部消化器、ウイルス性腸炎、蛋白漏出性腸炎にはTJ43、呼吸器疾患にはTJ19、泌尿器疾患にはTJ40、免疫性疾患にはTJ48、運動器疾患にはTJ53、精神障害にはTJ54を処方して行けば、イヌの日常診察を網羅できる。

この漢方エキス顆粒の処方方法は、どの位の量を処方しての結果だと言うと、昨年3月から今年2月迄の総量37.995g、薬価換算611.988円の20倍以上の症例結果である。当院の年間薬品購入額の5%でしかないが、この治療法は20年以上たった今でも存在感を感じさせ重要な位置にいる。

### 私の肺ガン経験からの犬の肺ガン処方

2005年1月に肺腺ガン宣告を受け、同年4月から肺腺ガン治療を受けた経験から肺ガンに適応させる漢方エキス顆粒は、TJ48が最も効果があると思っていたが、肺腺ガンにはTJ19も有効であるのではと感じた。その実体験からTJ19処方の症例を報告する。